博士号学位請求論文審査要旨

報告番号　甲　乙　第　　号　　氏名　林　敏潔

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学文学部教授　　関根　謙

副査　東京大学文学部教授　　藤井省三

副査　早稲田大学商学学術院教授　　小川利康

副査　東京大学大学院総合文化研究科准教授　　林　少陽

論文題目

日本における魯迅文学の源流と伝承
—その“師弟”関係をめぐる研究—

本学位請求論文は中国現代文学を代表する文豪魯迅(1881-1936)と日本の深い関わりをめぐって、日本語学習体験と外国文学翻訳経験を有する魯迅が、日本および日本語を媒介として如何に広義の“師弟”関係を構築してきたかについて総合的な考察を進めた比較文学的研究である。

魯迅は1902年に日本に留学し、宏文学院で二年間日本語等を学んだ後、仙台医学専門学校(現在の東北大学医学部)に進学したが、一年半後に同校を退学し、1906年から09年まで東京で文芸評論を執筆し欧米文学を翻訳した。その後彼は、東京帝国大学文学部で中国文学を専攻したのち上海に渡った増田渉（1903-1977）に対し自宅で長期の個人指導を行い、弟子の女性作家の蕭紅

（1911-1942）を東京留学に送り出した。また魯迅は多くの日本の作家とも交友関係を築き、日本と深い関係を持ち続けた。日本の新聞は1920年代より現在に至るまで魯迅に関する大量の報道を行い、日本の演劇人は魯迅逝去の直後から魯迅作品を戯曲化し魯迅の伝記的戯曲を執筆してきた。そして現在まで、日本の国語教科書は多くの魯迅作品を収録して、中学高校の生徒たちに魯迅文学に親しむ機会を提供してきた。本論文は、こうした魯迅と日本との関係を多方面から論じた意欲的な業績である。

【論文の構成】

次に本論文の構成を述べる。本論文は序論、終章のほか、全八章からなっている。

序論　本稿の課題と構成

第一章 松本亀次郎の日本語教育と魯迅

第一節 日本語教育者松本亀次郎の生涯

第二節 宏文学院日本語教室の交流

第三節 魯迅と『日文研究』

第二章 アンドレーエフ「謾」「黙」と魯迅の国民性論

第一節 「誠」と「愛」

第二節 アンドレーエフの文学――中国人の国民性改造の精神療法――

第三節 アンドレーエフの小説「謾」「黙」と中国人国民性の「誠」「愛」

第三章 魯迅と増田渉

第一節 増田渉直筆注釈メモの調査により拓かれる新しい地平

第二節 短篇小説「孤独者」の中の空白と「lover」の発見

第三節 短篇小説「傷逝」と「孤独者」

第四節 「lover」の謎と両作品の相互補完関係

第五節 「孤独者」の主人公の名前の深層

第六節 「孤独者」と「傷逝」のテーマ

第七節 魯迅訳『労働者シェヴィリョフ』と「孤独者」の主人公

第四章 魯迅と林芙美子 ――上海訪問と中国版ミニ“放浪記”の誕生――
第一節 「大陸へ」――中国への親近感と消夏旅行の予告――
第二節 「秋の杭州と蘇州」――1930 年中国の旅の後半部――
第三節 魯迅を再訪

第五章 魯迅と蕭紅
第一節 蕭紅と日本の関わりについて
第二節 蕭紅ブームの中の伝記映画二作
――霍建起監督『蕭紅』と許鞍華監督『黄金時代』――
第三節 蕭紅著『魯迅先生の思い出』と蕭紅伝記映画の中の魯迅像
第四節 蕭紅の無言劇『民族魂・魯迅』
第五節 魯迅精神の継承

第六章 日本の主要メディアによる魯迅文学の伝播
――『読売新聞』百年の魯迅関係記事を中心に――
第一節 魯迅と『朝日新聞』『読売新聞』
第二節 『読売新聞』魯迅関係記事第 1 期(1922～1945 年)
第三節 『読売新聞』魯迅関係記事第 2 期(1946～1975 年)
第四節 『読売新聞』魯迅関係記事第 3 期(1976～1995 年)
第五節 『読売新聞』魯迅関係記事第 4 期(1996～2015 年)

第七章 日本における魯迅作品の戯曲化およびその上演
――「阿Q正伝」「藤野先生」「鋳剣」を中心に――
第一節 魯迅作品の戯曲化による受容と改編および上演の歴史
――田漢編『阿Q正伝』劇の林守仁訳を起点として――
第二節 日本における魯迅戯曲作品
第三節 日本人による魯迅作品の戯曲化およびその上演
第四節 日本人による魯迅の生涯の戯曲化およびその上演

第八章 日本の中学・高校国語教科書の中の魯迅
第一節 日本における魯迅翻訳と魯迅文学の受容に関する概観

第二節 中学国語教科書の中の魯迅
第三節 高校国語教科書の中の魯迅
第四節 国語教科書魯迅作品掲載史の研究をめぐって

終章にかえて
関係拙論一覧・参考文献

【論文の概要】

林敏潔君は「序論」の中で本論文の概要を述べた後、第一章において松本亀次郎（1866-1945）と魯迅との関係に焦点を当てて、魯迅の日本留学期の経歴および思想形成の背景を考察している。師範学校教授としての長年の教歴を有していた松本は、1903年に東京高等師範学校校長の嘉納治五郎から宏文学院に招かれ、中国人留学生の日本語教育担当教授となり、その後の半生40年近くを中国人留学生教育に捧げており、厖大な数の留学生から深い信頼と敬意が寄せられていた。林君は、宏文学院における松本と魯迅たちとの間に行われた知性溢れる交流に着目し、そこに教育と研究が一致した理想的師弟関係が築かれていたと指摘する。そして魯迅に日本との縁結びに不可欠の日本語を教え、その後の魯迅の文豪兼翻訳家兼学者としての大活躍を見守り続けた松本こそ、魯迅にとって最初の日本の“師”であったと明言している。

本章において林君は、松本の故郷における幾度もの調査などにより得た新資料を用いて、松本と魯迅とが日本語と中国語との文法の異同を論じあった日本語クラスの熱気を再現しつつ、魯迅の厳格な翻訳態度の原点は、宏文学院の松本の日本語教室にあると推定する。そして松本が魯迅を始め、秋瑾（1875-1907）、周恩来（1898-1976）をも含めた中国人留日学生の就学の道を助けてきた事実を確認し、これら中国人留学生たちが故国中国の発展のために大いに貢献したことの背景には、松本の影響があったことを指摘する。こうして松本亀次郎の日本語教育が魯迅文学の源流の一つであることが解明されていく。

第二章は、林敏潔君が北京魯迅博物館における魯迅旧蔵書の調査などにより得た資料を用いて、留学時代の魯迅がロシア人作家アンドレーエフ（1871-1919）の「謾」と「黙」の二作品を翻訳した目的および両作と魯迅の最初の小説「狂人日記」との影響関係を明らかにしている。日本留学時代に文学による中国人の国民性改造に力を尽くしていた魯迅は、外国文学作品に多くのことを

学んでおり、世界文学短篇集『域外小説集』刊行はその成果であった。林君は欧米・日本で当時流行していたアンドレーエフ作品の中から魯迅が「謾」と「黙」を選んで翻訳したのは、両作が当時のロシア社会において人と人との間を隔てている精神的な障壁としての「虚偽」と「沈黙」とを抉り出しており、この翻訳により「誠」と「愛」の欠如という国民性の自覚を中国人に促すことができると考えていたためと推定する。そして、異常で狂気を帯びた心理を描写し、中国人における「誠」と「愛」の欠如のありさまを描き出した1918年の魯迅の創作「狂人日記」は、アンドレーエフの「謾」「黙」を源流としていると説得力に富む結論を導く。

第三章において林君は、増田渉と魯迅が80年前に上海の魯迅宅での個人講義用教科書に使っていた直筆注釈版『吶喊』『彷徨』の詳細な調査結果を用い、魯迅文学の日本語訳改善の可能性を示して、魯迅小説の難解な部分に対する新解釈を提示する。林君はこの調査において「lover」「悪心」などの魯迅作品解釈に有用なメモを発見しているのだが、これにより魯迅唯一の恋愛小説である短篇「傷逝」脱稿の日が、別の短篇小説「孤独者」完成の四日後ではあったものの、内容的には「傷逝」が「孤独者」の「前篇」であり「孤独者」は「傷逝」の「続篇」と位置付けられることを証明する。つまり「孤独者」と「傷逝」とは「lover」を喪失して孤独寂寞へと向かい、最終的に連続死の運命へと歩んで行く女性主人公・男性主人公たちを描く連続小説であることが解明されるのである。林君は本章において「孤独者」主人公の魏連殳が「私に幾日かでも生きることを願った人」とは誰かについて有力な推論を展開し、両作が相互に空白を補填しあいながら濃厚な継承呼応の関係を構成していることを論証している。また林君はこの過程で「lover」のほか、「孤独者」主人公魏連殳の名前の隠喩、両作品の日付に付された「畢」という文字の謎についても明快な解釈を提示している。さらに本章で林敏潔君は、魯迅訳アルツィバーシェフ（1878-1927）原作の長篇小説『労働者シェヴィリョフ』（原作1909、魯迅訳1921）と「孤独者」との影響関係について考察し、劇場でピストルを乱射するシェヴィリョフの復讐と比べると、魏連殳の復讐は遥に穏健なものではあるが、絶望的復讐という情念において共通している点を指摘する。

第四章は、林芙美子（1903-1951）の中国版ミニ「放浪記」とも言うべき杭蘇旅行エッセーを分析し、彼女が独自の中国理解を深めることによって、魯迅との篤い“師弟”関係を築くにいたるプロセスおよびその内実を考察してい

る。林敏潔君は、消夏旅行の予告としてのエッセー「大陸へ」が林芙美子の中国への親近感と期待を語り、「秋の杭州と蘇州」が1930年の中国放浪体験に基づき、当地の景色、風習、個人的体験について叙述すると同時に、郁達夫、魯迅等の文人との交流を記録している点に注目し、林芙美子が当時の北伐戦争後の都市の社会状況と、国民党による共産党弾圧の政治状況を観察し、近代化の中で存在する貧困に対する切ない共感を表明していることを確認する。各種の肉体労働体験を持つ林芙美子は、満州事変から日中戦争へと向かう日中両国関係最悪化の時代に、中国の庶民の暮らしの中にも入っていき、それを題材として優れた小説や旅行記を執筆しているのだが、魯迅はこうした林芙美子の執筆姿勢を深く信頼して激励し、林芙美子との間に国境を越えた文学者同士の友情を育んできたと林敏潔君は指摘する。そして林芙美子自身も魯迅を師と慕い、魯迅の名作を「詩を読むやうに」愛読しており、同じ東洋人として魯迅を誇りに思っていたと推論し、彼女の魯迅に対する敬愛の言葉の数々は、詩人にして小説家であり、上海での出会いという縁により魯迅の“弟子”となった林芙美子にして初めて言い得たものであると主張する。林敏潔君はそれが「当時の日本の多くの魯迅文学愛読者の気持を代弁するものでもあった」と指摘しているが、この指摘は第六章を合わせ読むとさらに説得力に富むものとなる。

第五章で林敏潔君は、蕭紅の伝記映画『蕭紅』（霍建起監督、2012）、『黄金時代』（許鞍華（アン・ホイ）監督、2014）の二作を中心に新見解を展開する。林君はこれらの作品に、孤独な日本留学を通じて魯迅に対する深い理解に達した蕭紅の姿、および彼女と魯迅との“師弟”関係が生き生きと描かれていることを確認し、東京で独り暮らしをしていた蕭紅が魯迅の訃報に接した際の心情と、当時の蕭紅が自らの苦境を敢えて「黄金時代」と書き記した真意を解明していく。続いて、近年の蕭紅ブームの火つけ役となったこの映画二作における魯迅像とその素材となった蕭紅の作品『魯迅先生の思い出』などを取り上げながら、「満州」より脱出した蕭紅と魯迅との間の感動的な深い師弟愛および蕭紅による魯迅精神の伝承を考察する。そしてこの『魯迅先生の思い出』が魯迅の多くの霊感に満ちた暮らしの細部を鋭敏に捉え、個性、感情、気質などにおいて魯迅の思想と人格を生き生きと表現したことを明らかにしていく。また林君は、蕭紅創作の無言劇『民族魂』が独自の表現により魯迅精神の伝承に大いに貢献したことも本章で解明している。さらに林君は統計的資料も駆使し

て、この映画二作が現代の人々に、蕭紅の人生と文学および魯迅と彼女との師弟関係について深い思索を促してきていると指摘する。

第六章は、100年を優に越す魯迅報道の歴史を有する日本の新聞メディアを通じて、魯迅文学の伝承状況を第１期1922～1945年、第２期1946～1975年、第３期1976～1995年、第４期1996～2015年の四期に分けて考察し、新聞メディアが広大な魯迅文学伝承の展開を主導していたことを明らかにしている。まず林敏潔君は、1920年代に始まった魯迅関係報道が、1930年代から1945年8月までの間は、険悪化する中日関係の中で日本人に貴重な同時代中国理解のための情報源であったことを指摘する。そして戦後アメリカ占領下でも魯迅関係記事は細々とではあるが維持されており、1952年の日本独立回復後には、魯迅文学翻訳や魯迅戯曲化作品上演、魯迅ゆかりの中国人来日等に関するものを中心に魯迅関係記事が急増し、このような報道がアメリカによる社会主義中国包囲の網をくぐり、日中友好の機運を高めていたことが解明される。また文革終了後には日本の魯迅研究が最初のピーク時期を迎えており、中国人の日本留学が本格化し、日本人の中国訪問も急増していたことを受けて、中日両国の魯迅関係書の紹介や魯迅曾遊の地仙台や魯迅の故郷紹興などに関するものを中心に魯迅関係記事が増え続けていたことが明らかにされる。最後に1990年代以降においては、中国の経済的発展に伴い中国人来日客が急増するなど、より広く深く多様化した中日文化交流が展開し、中国人の日本理解の方法としても魯迅の重要性がさらに高まっていると分析する。

第七章は、前章の方法を魯迅戯曲化作品の受容史研究に応用したものである。林敏潔君はまず、日本では魯迅逝去直後から魯迅戯曲化作品の翻訳やシナリオ化作品の創作が始まり、1939年8月には新劇『阿Q正伝』が上演されており、戦後になると魯迅戯曲化作品の上演がますます盛んになっていたことを確認し、日本独自の魯迅文学伝承史を形成してきたと指摘する。特に魯迅戯曲化作品が魯迅小説の戯曲化に留まることなく、「魯迅伝」風の戯曲へと展開した点に着目し、霜川遠志の演劇活動やそれを継承する石垣政裕ら劇団仙台小劇場活動に関して詳述する。そして井上ひさしの『シャンハイムーン』において、魯迅に対する深い敬愛の思いとユーモアにあふれる作劇法により商業演劇としても成功していた事実を解析する。本章は新聞メディア等の資料を駆使し、これらの戯曲作品によって日本人の魯迅に対する親近感がいっそう深まってきた経緯を明確に論述している。

第八章は、戦後日本の中学・高校国語教科書における魯迅文学伝承の研究である。林敏潔君は2008年刊行の『教科書掲載作品 小・中学校編』等の先行調査に加えて、教科書研究センター附属教科書図書館における中学・高校国語教科書の調査および教科書出版社各社に対する最近四年間の新規中学・高校国語教科書出版状況に関するアンケート調査を独自に行い、日本の中学・高校国語教科書における魯迅作品収録状況を具に検討している。そしてアメリカ軍占領下からの主権回復直後の1953年には中学国語教科書に、翌年には高校国語教科書に相継いで魯迅作品が採用され、国交正常化の1972年以後はすべての中学国語教科書に「故郷」が採録されてきた経緯を確認し、日本の中学・高校の生徒は国語教科書を通じて魯迅と“師弟”関係を結んできたことになると指摘する。また林君は、魯迅作品に関する教科書の設問、教師用教科書指導書の解説、中学生・高校生の感想文などを収集・分析し、日本の青少年の中に魯迅精神が深く伝承されていったことを詳述している。

終章において林敏潔君は、日本留学が魯迅文学形成において決定的に重要だったことを再度強調し、魯迅を中心に様々な形で結ばれていった“師弟”関係が実り豊かな人間的交流を紡ぎ出し、さらに現在もなお、そうした理想的な人としての繋がりが国境を越えて力強く展開していると主張する。

【審査要旨】

日本および日本語メディアにおいては、魯迅をめぐる“師弟”関係の構築および文学の伝承は110年以上の長い歴史を有しており、21世紀を迎えると多分野の研究者や広範な一般市民による活溌な文化活動へと発展し、さらにマスコミ報道の助けを得て日中両国交流の一つの柱となっている。本論文はこのような魯迅文学の重層的な伝承・受容の様相を、オーソドックスな文献による考証研究と斬新なメディア研究とを併用して総合的に論じており、説得力のある論考となっている。

林敏潔君は第一章で魯迅の日本語教師であった松本亀次郎に焦点を当て、松本の故郷静岡における幾度もの調査などにより得た新資料を用いて、松本と魯迅とが日本語と中国語との文法の異同を論じあった日本語クラスの熱気を再現しつつ、魯迅の厳格な翻訳態度の原点が、宏文学院の松本の日本語教室にあると推定している。そのうえで、魯迅を始め、秋瑾、周恩来をも含めた中国人留日学生の就学の道を助けた松本の日本語教育が魯迅文学の源流の一つとなっている

と結論づけているのだが、この展開は本論文冒頭の論考として構成的にも成功している。

この松本亀次郎に関する論考および第二章で論じるアンドレーエフ、第四章の林芙美子についての比較文学的研究方法は堅実で明快である。ロシア人作家アンドレーエフの小説作品は国民精神の改造を決意した魯迅が留学中に翻訳紹介した作品で、林敏潔君は北京魯迅博物館における魯迅旧蔵書の調査などにより得た資料を用いて、アンドレーエフ作品が魯迅「狂人日記」に与えた大きな影響について考察を進めている。また林敏潔君は林芙美子の杭蘇旅行エッセーを分析し、彼女が独自の中国理解を深めることによって、魯迅との篤い“師弟”関係を築くにいたるプロセスおよびその内実を考察し、日本の文学者の魯迅に対する敬愛の念が丁寧に描出されている。これらの研究はすでに日中両国の学術誌、専門誌に発表された林敏潔君の業績であり、韓国やアメリカの魯迅研究者からも高い評価を得ていることは注目に値する。

第三章で展開した増田渉旧蔵魯迅講義録に基づく魯迅作品「孤独者」「傷逝」に関する論考は、本論文各章の中でも傑出した業績である。魯迅研究の巨人である増田渉は上海の魯迅宅で「吶喊」「彷徨」の個人講義を受けていたのだが、その際に魯迅と増田本人の注釈メモが、二人の使用した刊本に直筆で書き込まれていた。こうした資料の存在は、魯迅研究者の間では良く知られていたものの、有効な研究方法がないままに残されてしまったという経緯があるもので、林敏潔君はそうした貴重な資料を縦横に読み込むことにより、綿密な解析を重ねて魯迅作品の新たな解釈の可能性を切り開いたとも評価でき、林敏潔君の魯迅研究に対する大きな貢献と認められよう。

第五章は近年中国で相次いで製作された蕭紅の伝記映画二作『蕭紅』『黄金時代』に注目して、両作が描く魯迅と蕭紅の感動的な師弟関係イメージを論じるという斬新な魯迅論である。霍建起、許鞍華両監督は日本でも名声を博しており、両作品は日本人の魯迅イメージ形成にも影響を与えているものと推測されるもので、実像の精査を元に検討する本論考は独創的である。

今回博論全体の中で林敏潔君の研究の特殊性が現れているのは、本論後半三章の論考であろう。日本における魯迅受容は、これまで翻訳や評論、研究論文という位相で論じられており、市民や青少年における受容はほとんど論じられていない。第六章は『読売』『朝日』を使って100年に近い魯迅報道の歴史を考察するという先駆的な研究である。日本の新聞メディアが魯迅文学の日本に

おける普及のために果たした大きな貢献は、広義の“師弟関係”の拡大とも言えるものであり、その大要を明示し得たことは、注目に値する成果といえよう。第七章は魯迅作品・伝記の戯曲化とその上演に関する新聞報道の精査の総括であり、第六章を集約的に発展させた興味深い研究である。第八章は日本の国語教科書における魯迅受容史で、これも青少年における魯迅受容を考える際に画期的論考とみなされるものである。中学・高校の国語教科書収録の魯迅作品は十代の青少年を対象としており、教室において教師の指導のもとに学ぶテキストである。ここに見られる「学び・学ばれる」という日本の中学生・高校生と魯迅との関係は、未来を志向する重要な研究課題とみなされるもので、著者が準備している新たな研究の序説としても位置付けられよう。これら三章に関して林敏潔君は長年かけて厖大な資料を収集しており、今後の展開が期待される。

以上のように、林敏潔君の論考は日本における魯迅文学の伝承を多方面から論じているのではあるが、論考に若干の瑕疵が残っていることも指摘しなければならない。それは第一に、一気に多くの課題を展開したことにより、各章相互の必然的関連性が薄れてしまった感を拭えないことである。またこれに関係することであるが、第二に、推論の根拠が時として主観的に走りがちな傾向が見うけられる。特に魯迅と蕭紅の“師弟”関係に対する考察は、林敏潔君のロマンティックな感傷が先行する嫌いのあることも指摘しなければならない。また第三に、後半三章においては膨大な数量であるためやむを得ないとも思えるものの、やはり記事や資料の羅列の印象が残る。いずれも今後のさらなる研究の進化が望まれるところである。しかしながら、こうした瑕疵も本論文全体の成果を否定するものではない。本論文が世界の魯迅研究に寄与するだけでなく、日本の外国文学研究にも大きな影響を与えることを確信し、審査委員一同は林敏潔君の本論文が博士(文学)の学位を授与するに十分な水準に達していると判断した。

林敏潔君の学識確認をいたしました。

学識確認　　慶應義塾大学文学部教授　　関根　謙